

# 富士谷御杖における理と欲と神

大久保 紀 子

御杖が『古事記』の注釈書において取り組んだ問題は、理と欲をどのようにして両立させるかということであった。御杖は理と欲をどのようにとらえていたのか。理と欲の両立が可能であるという根拠はどこにあったのか。また、神はその問題を解決する上でどのように位置づけられていたのか。これらが本稿の考察の課題である。

## 一、天地の和順

されはいはゝわれも身勝手をせぬ故に人もみな身勝手をつゝしみてゐるを天下泰平とするは實は危き事也いつ心かうつらうもしれぬ事也不安心なるもの也しかしまつこれにてはひとゝほり天下泰平とみゆるものなるか故にかやうにひとゝほりにてよしと思はむ人ならば神道はいらぬ事也これにては気のすまぬ不安心なる物也同しくはたしかに仕たきと思ふ心あらん人ならば神道は必定入るへし

（『神典拳要』全一、八九七頁）

互いに身勝手をしないという強いられた努力によって、泰平が保たれている状態に御杖は不安を覚える。これでは「いつ心かうつら

うもしれぬ」。しかし、神道によれば、より確実な安定した状態が得られると御杖は考える。神道によれば「我も人も勉強用ふるにをよばず、所欲は公私大小となく達せずといふ事なく、しかも孝悌忠信の美事、つとめずをしへずしておのづから生ずる」（『古事記燈大旨』全一、八四頁）という状態に至る。理を強制されるのではなく、欲も達成され理も自然に成就し、安定している状態を御杖は理想とした。

このように欲と理の両方が成就することが可能であると考える根拠は、天地における二気の和順にあった。

おほかた天地のかたち、天はつねにその気降り、地は常にその気昇る、その昇降の二気つきあふ事なきより天地相和順し萬物生々して、長く久しきにあはせ給へるにて、その長く久しく和順なる事、昇氣を始とするにある事なる（以下略）

（『古事記燈大旨』全一、八二頁）

天と地はそれぞれ清陽と重濁という正反対の性質をもっているにもかかわらず、対立することなく、久しく和順し万物を生み出して

いる。これが理と欲という正反對のものの両立が可能であることの根拠である。天地の和順は「昇氣を始とする」。つまり天からの降氣からではなく、地からの昇氣から始まることに留意したい。人も次のように天地の二性を享けていると考えられる。

おほかた人うまるゝ時は其因りて来る所を知らねとも死する時は心は天に帰し身は地に帰する事皆人しれる所なりされは心は天の化成身は地の化成うたかひなしかく天地化成して一渾となり一人となるその心に属せる念と身に属せる念有て心に属せる念は清く身に属せる念は濁れりこれを神代卷に清陽天となり重濁地となると見えたりこの二念言行となりいつるこれを善惡といふ也

〔古事記燈〕全一、五九二頁)

人の心は天の化成、身は地の化成である。そして心に属す清い念とは理、身に属せる濁った念とは欲をさす。したがって人も天地の二氣の和順にならうことよって、理と欲の安定した両立を達成することができると考えられるが、人は次の二点において、天地が示す和順とは程遠い状態にある。

第一に、天地は「尊卑に位しそのあはひいとほるかにして相したしむ事なきかゆゑにその中間にして萬物生々てやますいやとは長き物」〔古事記燈卷之一〕全一、五四九頁)と規定される。天地は二氣を循環させながらも、互いに遠く離れて決して混じり合うことなく、その中間において久しく万物が生々しているのに対し、人は天地を混合していると考えられる。

その心身の祖たる天地は上下に位しその間いとはるかにうちひらけて天の性地に混する事なく地の性天に混する事なきものなるに人の心身となり来りては身内に心あるは即天を内とし地を外とせるにてその天地のあはひひらけす天地ふたつなからわが有となるこれにあやかりて人といふ人悉くその思惟天地の二性を混したるこれやかてまことの天地を渾沌せるものとするなり

〔古事記燈神典〕全一、五三〇頁、五三二頁)

天地は上下に離れ、天の性と地の性が混じることはないが、人においてはこの二性、つまり心と身、あるいはそれぞれに生じる理と欲の二念がわかれず、渾沌としている。

第二点は、天地の和順は地からの昇氣から始まっていることに関する。地の化成が身であり、そこに生ずる念が欲であるから、天地の和順が地から始まるのならば、人においては欲から始まって理と欲が成就されなければならない。しかし人は「此理欲、天地にあやかりて、理はおのづから尊く、欲はおのづからいやしきが故に、人としては理をたふとび、欲をいやしむべきことなり」〔古事記燈大旨〕全一、六七頁、六八頁)とあるように、始まりであるべき欲を卑下する。

以上の二点を克服して、天地の二性をわけ、地の性から始めて和順をはかるようにすれば、人も天地の和順と合致し、努めずして理が成ると考えられる。人の場合、天地の二性をわけるとは、心と身それぞれに生じる二念、つまり理と欲をわけることであり、地の性

を始まりとすると、欲を主導とするということである。

## 二、理と欲

人における天地の二性である理と欲の性格について考察する。

「心に属せる念は清く身に属せる念は濁れり」(『古事記燈』全一、五九二頁)とあるように、理は清く尊ばれるものである。具体的には「美事」(『神典言霊』三九二頁)といわれ、さらに具体的には「孝悌忠信」(同右)という態度あるいは行為を指す。人は理を尊び、理にひかれて美事を為そうとするが、実際は純粹な「よごと」はない。その理由を御杖は次のように考える。

心は純粹なる天の性をうけて尊き物なれともその器地の卑性をうけたるか故にてかの水の方円にしたかふかことくおのつから卑念にしたかへはなり(細注略)かく尊念も卑念にしたかひてよごとなからまことよごとにあらざるゆゑをたつぬるにそのよごとなすに言も身の用なり行も身の用にてその身の用をからざればすへてのよごともなすへきよしなきか故によごとはよごとにして私なる事をまぬかれず

(『古事記燈卷之一』全一、五五一頁)

人は「よごと」を為そうとしても、卑性である身をとおして為さざるを得ないために純粹なる「よごと」を為すことはできない。人の為すことは極言すれば、すべて私に落ちる。しかし人は、天の性をも享けていることから理を重んじ「よごと」を求める存在である。ならば「よごと」を為すためにはどうすればよいのか。

人としてよごとはなさてかなはざる事はいまさらいふに及ばざる事なれとも言行を用ひてなす時はよごとゝはならざるものなるか故によごとかたく言行は用ひじと決断するをいふ也かく決断する時は胸中にして尊卑の二念あひたゝかふ事ふつにやみぬへければ外これにしたかひてきそひあるましき事おもひやるへし

(『古事記燈卷之一』全一、五五二頁)

「よごと」を為すためには、身の卑念を帯びている言行を用いないことである。明らかな言行を避け、所思を隠して倒言によって表現し、行為を隠して幽路においてなすことである。こうすることによって、「よごと」は身の卑念つまり欲から切り離され、その純善たる性質を守りきることができる。これは人における天地、つまり理と欲をわけることでもある。

では身に生ずる卑念である欲はどのような性格をもつのか。

天にくらぶれば地は卑しけれど、萬物の生ずるに、地を母とせざるはなければ、すべて尊卑とむかへるもの、其いやしき方が母なる事明らかなるが故に、渾沌して人欲を制しては、妙事をうむ母なくなりぬべきなり、さればいはゆる孝悌忠信のたぐひも、その生ずる母は人欲なる事しるければ、たゞ人欲をだに尽せば、孝悌忠信は、をしへずしておのづからうむべき也、この故に、わが神典、孝悌忠信等のをしへひとつともなくて、たゞその母のなすわざをのみもはらとをしへたまへるなり、

欲は孝悌忠信を生む母であり、欲を尽くせば、孝悌忠信はおのづから生まれると御杖は考える。「人欲をだに尽せば、孝悌忠信は、をしへずしておのづからうむべき也」とあるが、これは欲の性格をよく表している部分なので解説しておく。

欲情はゆかむと思ふ所まではゆかてはやまざるものなりこれ不動の性たる所以也しかれともその極をたに得ればとままる事これ又欲の性なりこれ私にいふにあらす夜極れは昼となるを半夜にして夜をあかさむ事あたはざるを思ふへし

〔神典言霊〕全一、四四二頁〕

欲は極みまでいけば尽きる性質をもつ。しかし、そうすれば理をやぶってしまうであろう。それでは理と欲の両立は成らない。ではどのようにすればよいのか。御杖は「大かた所欲の理をやぶるはもと理とたゝかふ所に路するかゆ多なり」〔神典言霊〕全一、三八七頁〕と考へ、「それは欲情に理をもてたゝかふ事しかるへからざる事を決定し欲に理外の路をあたへなは欲は内を路とし理は外を路として理欲長くたゝかふ事あるましかるへし」〔神典言霊〕全一、三八九頁〕とする。欲を尽くさせるためには、欲と理をつきあわすことのないようにわけることが必要である。欲は内、理は外とわけて、それぞれを成就させる。「よごと」を為すためには、それを卑の念（つまり欲）を帯びる言行から切り離さなければならなかったのと同様である。欲は内理は外とわけ、欲が内で尽くされれば、おのずと外に理がなる。欲が理を生むとは、文字どおり欲から理が生まれ

るのではない。最初に理と欲がわけられ、人における天地の渾沌が解消される。これによって理と欲の対立は避けられる。理のために欲が不当に制されたり、それによって欲がかえって大きくなったりすることはなくなるわけである。そして欲がその与えられた分野である内において尽くされ成就するとそれが外に理がなる誘因となる。欲の成就が先にあり、それを前提にしてはじめて理が全うされる。こうして達成された理は、努めて為したものではなく、天地の和順になつておのずから成つた、安定した理であると考えられた。

### 三、神

では神は、どこに位置づけられ、どのような意味を付与されているのか。

#### 1、生力としての神

御杖は『日本書紀』の伊弉諾尊、伊弉冉尊の国生みについて次のように述べている。

そもく国土山川などは、もとより有つるなるべけれど、国土にも山川にも神おはしまさねば死物なり。死物なればあるもなきがごとくなる物なるが故に。此二神の時はじめとなり出らんやうにかゝれたるは、すなはち、山をばおのが有としまふ神、川をばおのが有としまふ神たちを、うみ出させたまへるよしをいふ也。此御時よりよろづの死物みな神しづまりまして、今にその御たまのふゆをかうぶり居る事とはなれるなり。さればいとほかなき物とても、皆かくのごとく神おはします物なれ

ば、あなどりかろしめ思ふ時は、かならずその御とがめあるべき事也

〔真言弁〕全四、七二五頁

国生みによって、それまで死物だった山川草木に神が鎮まり、その「御たまのふゆ」を賜わることになった。神の「御たまのふゆ」によって活されるようになったというのである。だから「萬のものと、く神の御すゑならぬものなし」〔真言弁〕全四、七二五頁〕といわれる。このように神はすべてのものの内にあって、それを活かす生力力である。

人ももちろんこの生力力によって活かされている。「人の体内の虚間やかて天地の虚間同物なる」〔古事記燈七神三段神世七代〕全一、九六頁〕ことから、天地の昇降二気は人の体内にも通って、呼吸となっている。

凡人の活たるは呼吸に身のすかりたるか故なりその呼吸は即天地昇降の二気にて昇降の二気は天地の活物の本にて昼夜うこきて万世たえざる物なり此故に人身はもと死物なれと活て種々の妙用をなすは皆天地の活気すかりたればなり

〔神典拳要〕全一、八八六頁

人は、このように昇降二気によって活かされているが、この昇降二気こそ神である。「この二気のうちその降るは天神なり昇るは地祇なり」〔古事記燈七神三段神世七代〕全一、九六頁〕。神は昇降二気として、天地におけると同じく、人にも通い人を活かしている。人の内に天地と同じ神がある。

この昇降二気は、決して無規則に昇降を繰り返しているわけではない。

神道を学ばむにはまつ神道の大意をしるへしその大意といふはおほよそ神は天地にましますこれを天神地祇と申すこの天神地祇次第を乱さすよく持あひて昇降二気をつかさとり給ふかゆゑにその昇降二気の間にして萬物生々してやむ事なき也しかれば天神地祇なのに為に昼夜を捨す昇降の次第をみだし給はぬそといふに専萬物生々のためなりその次第をさして神道とはいふにて（以下略）

〔神典拳要〕全一、八七一頁

昇降二気である神自身が、「次第を乱さすよく持あひて」いる。その統括があつてはじめて、二気の間で萬物の無窮の生生が実現する。天地において神は昇降二気という生力力であり、その二気の次第を乱さぬ動きによって萬物の無窮の生生がなる。

2、人と対置される神

御杖の神の特色は、神が人と対置されている点にある。神は「人と同物にしてその用は筋たがへる」〔古事記燈大旨〕全一、七七頁〕といわれる。「その用は筋たがへる」という違いは神と人の性質の差異に由来する。神はどのような性質をもっており、人とのような点が異なるのか。

そも神とは幽中にありて動かさむとすれともうこかぬものをいふしかるに此神うこかさむとするにはうこかねとも心から動

く次序ありこれを神道とはいふなりこれいかなる理とも得てとくへからざるものなりこゝにまた顕露のさかひにおきて道理といふものありいはゆる人道これなりこの人道の理はかり尊きものはなければ此顯理をあてゝしたかはしめその道をかへさせむとするにかつてしたかはざるものなれば大かた人力をもては自在すへからざるこれ神のたふとき所以神道のやむことをえざる所謂也

〔古事記燈七神三段神世七代〕全一、九五頁)

「幽中にありて」とは「天地間人の耳目にかゝらぬ所をさす名なり」〔古事記燈七神三段神世七代〕全一、九五頁)と解説されている。神は目に見えぬ所にある。神は幽中のものであり、理や人は「顕露」(同右)のものである。「動かさむとすれともうこかぬ」とは、神は「大方人力をもては自在すへからざる」(同右)のものであることをいう。ただ神道の次第によつて動かすことができるもの、それを神という。神と人はこのように、性質が異なる。存在の場所は人が顕、神は幽である。人は明らかなる理に従うが、神は理によつて理解できるものではない。だから「頭を據とすれば人なり、幽を據とせば神なる」〔古事記燈大旨〕全一、七七頁)あるいは「たゞ道理をはなれたる所の人のわざ、すなはち神にてはあるぞかし」(同右、七〇頁)といわれる。

このように人と神の性質の違いによつて、神は幽、人は顕と対置されたが、他にも次のような対概念を介して神と人が対置される。

たゞ直をなすは人なり、倒をなすは神なる也

〔古事記燈大旨〕全一、七七頁)  
たゞ外にていへば人なり、内にていへば神なるばかりなる

(同右、四六頁)

人かならず理欲の二つありて、その欲をつかさどるをば神といひ、理をつかさどるをば人といふ

(同右、六七頁)

これらに天と地を加えて、次のようにまとめることができる。

天 理 人 直 外 顯  
 ↔ ↔ ↔ ↔ ↔ ↔  
 地 欲 神 倒 内 幽

天地とは人がならうべきモデルであり、その天地の性は人においてそれぞれ理、欲となる。人は理を、神は欲を司る。直、外、顕、理は人の性質を表し、倒、内、幽、欲は神の性質を表す。また理と欲を中心と考えれば次のように言うこともできる。直倒、外内、顕幽は理欲を天地にならつてわけた場合のわかれ方を示す。理と欲はわかれて理は外に、欲は内に配置される。理は顕として外に現れ、欲は幽の中にある。欲は内、幽という隠れた見えない場所にある、倒言という隠された表現手段をとるが、それは神が無形であることによる。

なに事にもあれ言を用ふればやかてそのかたちあらはなるか

故に神はもと無形にましますにたかひて人力となる也不言にして事をなす時はやかて神にひとし

『神典挙要』全一、八七五頁)

形をあらわにする、たとえば直言したり、明らかに行為で示したりすることは、無形である神にたがうことである。しかし無形の神にならうて、思うところを隠して言わない時、あるいは思うところを内に隠して外には出さない時は「神にひとし」。つまり神と同様のはたらきが得られるということである。したがって倒、内、幽とは、欲の表現手段や居場所を示すのみならず、神のはたらきが得られる状態をも示す。一方直、外、顕とは人のはたらきがあらわれる場である。直言を避け、倒語すること、内に隠して外に出さないこと、顕路によらず幽路によること、これらはみな人の力によらず、神道の力によることである。神道の回路に入ることである。

このように、様々な対概念を介して、人と対置された神は、生力という実体を失い、概念と化している。1でみた神は、生力としての実体を持ち、次の3で述べる神道においても、四で言及される勧請においても、神の力が実際に発揮されている。しかしそれだけでなく、実体を失って概念化した面があることが、御杖の神の特色である。

### 3、神道

神道の力によるどのようなことが可能になるか。

おほかた人力といへども、つとむればいとしたゝかなる事もせらるゝ物にはあれど、その事たとひなりてもかならず久しか

らざる事、これ神道を後にするが故なり、神道に乗りてなす時は、たとへば、われ十人のちからあらば、千人が力なる事必成りぬべし一己の力はたとひ天下にをよぶとも、かきりありて萬世のすゑまでにをよぶべからず、神の道に乗り、神力をかりてゆくちからは、その及ぶ所、無邊なるべき也、されば此乗といふ心は、たとへば舟車にものをつみてはこぶ時は、おのが力をいくらあはせてもあたはざる斤量のやすくはこぼるゝがごとし、

『古事記燈大旨』全一、七二頁、七三頁)

人が努め、苦勞してなし得たことは、長く続かない。しかし神道によれば、人がなし得ないような難事が、確実にしかも恒久的に成る。

神道の力によれば何事も成るといふならば、天、理、人は無意味かというとうそではない。

かく神道は人道とすちをことにするものなるか故に人道重しといへとも神道にしたかはされは人道もたちかたき也こゝをもて神道にしたかふことを主としたまへるは即人道のおもきかゆゑなりとするへし神道にたにしたかは、これを孝これを忠とみつからもしらすしておのつから忠行全かるへければわか御教忠孝等のをしへなき也、

『神典言霊』全一、三三七頁、三七四頁)

神道と人道は「すちをことに」しており、それぞれ違った意味と性格をもつ。人道は重要であるが、しかし神道によらなければ実現

できない。人道が重要であるからこそ、是が非でも神道の力によらなければならぬと御杖は考える。地、欲、神とは、天、理、人の実現のための手段であるが、だからといって決して地、欲、神を卑下してゐるのではない。むしろその力を評価し、その力によつてこそ、人道ははじめて安定した形で実現されると考えられている。

#### 四、欲と理がともに成就される過程

はじめに欲を成就させ、それによつて理も全うされるという神道による方法の具体例を『古事記燈神典』、『神典言霊』、『古事記燈七神三段神世七代』にみる。

欲を成就させることが先であるが、欲は自力では成らない。自力によらずむしろ他者の力によつて、我が欲を達成するのが神道の方法であると御杖は考える。

たとへば人のもたる物をしひて乞はゞ多欲とおとしめひそかに取らは偷盗とにくむへきにもしその人その心から我に得しめむに我を多欲とも偷盗ともおとしめにもくみもすまじきか如くたゞ人こゝろからあたへ来らむを得てなりなむを諸欲の先途とおもひ定めなはわか力して成さむとする心もなくなりぬへければ外行のけがるゝこともあるましく自力をたのむ念に絶はてなはたとひいかなる所欲ありとて色にもなにかはあらはれん

『古事記燈神典』全一、五三七頁

たとえば、他者が持っているものを欲しいと言えば、欲が深いと非難され、密かに盗めば盗人として咎められる。しかし、もし他者

が自分からそれを我に与えようとするならば、誰も我を非難したり、咎めたりはしない。欲はこのように自力で成るものではなく、他者の力によつて、他者が我の欲を満足させようと思ふところから成るものである。他者に我の欲を満足させようという気持ちを起こさせることに努め、自力で欲を成そうとすることを断念すれば、欲は外にあらわれず、内は欲、外は理というわけられた分野を守ることになり、結局神道によることになる。みずからの欲を自力で達成しようとしてはならない。他者の力によつて、我の欲を成就させること、これが欲を達成する正しい方法である。

では、他者が我の欲を満足させてくれるようにしむけるためにはどのようにしたらよいのか。

大かた人のわかために力をかさぐるは人また我と等しき欲念ありてみつから成さむとすれば妖来りなざしとすればおもひやみかたき事あるか故にそれを患ふるにいとまなさにその力をも得かさぬ也けりこれによりて人のちからをわか所欲のためにからむとにはまづその人のうれふる筋にわが力をかすへししかる時は人そのうれひにいとまいで来るよりおのつからわか所欲のためにその力をかし来らむ事必然のいきほひなるなり

『古事記燈神典』全一、五四〇頁

他者が我の欲をすすんで達成させようと思わないのは、他者自身欲をもち、それを達成したいが自力で達成しようとする、非難されたり軽蔑されたりしてよい結果にはならない、かといつて欲をあきらめることもできないという理と欲の板ばさみの状態にあって余

裕がないからである。他者の心をこちらに向けるためには、まず他者を理と欲の板ばさみの状態から解放してやるが必要である。具体的に言えば、他者の欲を成就させてやることである。我の欲を成就させるためにまず他者の欲を成就させるのだが、単純に我儘を受入れ、欲を満足させても、他者が心配するところ、世間から制止されたり、非難されたりするだけである。かといってその欲を捨てさせるわけにはいかない。この状態こそ神道の力が發揮される場である。「かれ他よりかたく制止せられてその制止やふるへからすしかもその所欲すつへからぬ内外おしあひの中間を握らん事神事の初門たるへきそかし」『古事記燈七神三段神世七代』全一、一二二頁）「内外おしあひの中間を握」とは「その人の所欲にひとへに荷膽すればそれを制止する人の心をうしなひそれを制止する人の心にもはら荷膽すればその人の心をうしなふこれをふたつなからうしなはざるをいふ」（同右、一二四頁）とあって、他者の欲があらさまに成就されることを制止する世間の人の心、つまり理と、他者の欲が共に成るようにはからうことである。そのために、その名のとおりに「おしあひの中間を掌握する」（同右、一二二頁）天之御中主神が勧請される。

この神（天之御中主神、筆者注）たによく胸中に勧請したてまつりてかれかうれふる所の世の制止をたになこめなは（細注略）神事はこれにてたりぬへきなり、

『古事記燈七神三段神世七代』全一、一二六頁）

世間の制止も否定せず、また他者の欲をも成就させるために天之

御中主神が勧請される。天之御中主神の力によって世間の制止をなだめるとは、具体的にいえば、欲を理で覆い、外では理が成るようにながら、内では欲を満足させることである。この試みが成功するためには次の二つの条件が必要である。第一に、理は外、欲は内というわけられた場を守る事である。欲の配置された場は内であり、幽であった。それにしたがって決して他者の欲をあらわにするような方法をとってはならない。欲は内に秘められ幽路によって交通されなければならぬ。また外は理であることを守らなければならぬ。卑念を混じえてはならない。内外に分野をわける形で、外は純善たる理を守り、内では欲を尽くすという形でなければならない。第二に、欲は極みに達すれば夜が昼になるように尽きるが、行き着くところまでいかなければやまないという不動の性質をもってゐる。したがって他者の欲を許す場合も、倒言や幽路によって、その欲が極まるまで許さなければならぬ。それを前提として初めて理も成るからである。以上の二点を守るとは容易なことではない。しかし、物事の真中に立つ天之御中主神を勧請し、そのはたらきによって、あくまでも理と欲の両立をはかる。それが、神道によるということである。

この条件を満たして、成功した例を『神典言霊』（全一）の四三〇頁から四五〇頁にみる。彼（他者）には欲があるが世間の非難を避けるために、それを理で覆って隠している。我はその欲を見透かして、世間が納得する理屈をつけて、その欲を許してやる。そうすることによって、彼が我に恩義を感じ我の欲を成就させてくれることを待つ。我は我の欲を隠し、まず彼の欲を理の名において許す。

彼は彼で欲を隠し、欲を理で覆いながら、次々に欲を許せと迫ってくる。こうして表面には彼と私の理のやりとりしか見えないが、水面下では、欲の駆け引きが幽路を通してなされている。我は彼の欲が尽きるまで気前よく許す。こうして彼の欲が尽くされ、そして彼に理が生ずるのを待つ。彼の欲を許しに許しているうちに、みずからの欲の成就ばかりを思っていた彼の心が一変する時がくる。

人の欲情適したらんには今までもおのかうへをのみおもへりし心一変しわかうへをおもう心かならず人に生ずへきをうたかふ事なかれ

〔『神典言霊』全一、四四三頁〕

彼の欲を尽くさせた結果、彼は自然に我のことを考えるようになる。これが、欲を尽くした結果、彼の心に自然に生じた理である。彼は我を思い、私の欲を察して、我が彼に為したように、理で覆いながら私の欲を許してくれるようになる。こうして彼において内の欲は成就し、外に理が成り、我においても理と欲の両方が成就する。このように、内は欲、外は理とわけることによって、そして欲の成就を先にすることによって理と欲の両方が成就すると御杖はいう。しかしこうした曲芸のような方法が成功する保証はどこにあるのだろうか。その保証は、欲と理をわけ、欲を先に成就させるといふ方法が天地が示す和順の形に合致しているという点にある。

理を衣とし欲を主とすへきわか御教実事によりてやむことを得ざるのみによりての私言にあらず悉く天地にあはせたるもの

なり

〔『神典言霊』全一、三七七頁〕

欲を主導とし、それを理で覆って先に成就させ、それによって理が成就するようにすることは「私言」ではない。天地が示す和順の形に合致する客観的な方法であると御杖は考える。

これは理欲を幽頭に配しその幽頭を正側とたつる事わか御教の要訣にしてこの心法明らかなれば天地の神祇その御心とひとつとなるかゆゑに繁昌長久もいかてか天地とともにあらざるへき

〔『神典言霊』全一、三七七頁、三七八頁〕

「正側とたつる」とは幽を主とし頭を副とするという意味である。「理欲を幽頭に配しその幽頭を正側とたつる」とは欲を幽、理を頭とわけ、欲を主とするということになる。そうすることによって、天地の神祇の御心に合致し、天地が無窮の生々を続けるように人の繁昌長久も保証されると考えられた。

以上考察した過程は、私の欲を理とともに達成するために他者を利用する非常に利己的な方法のように見えるかもしれない。しかしそうではない。我が、彼の欲を尽くすことによって、みずからの欲を達成するという行為は、決して利己的な行為ではなく、どれだけ神の妙用を信じ、どれだけ人力を捨てて神道の力によることができるかという信仰の試みなのである。天地が示す神道の方法に合致する方法をとれば神道の妙用があることを信じ、本来ならば人が為しえない理と欲の両立をはかるといふ試みを、神のはたらきに依って

為す時、その信仰に報いるように、彼の心に我を思う心が生じる。理と欲をわけ、欲を主導としている時、たしかに神ははたらき、奇跡的に理と欲の両立が成る。

しかし、このように理と欲の両立のために我と彼の間ではたらく神は、すでに天地において生生を実現する神とその実態を異にしていると考えられる。神は、天と地の間で生生をなすごとく、人においても、理と欲の間に立っている。また、確かに天之御中主神を勧請することによって、彼の心に我を思う心が「生ず」とあり、神のはたらきが何かを生むことである点において一貫している。しかしこの場合、彼の心において生じた理は、実質的には生生の結果というよりも、我と彼の間で理と欲の調整の結果である。つまり神は理と欲の調整に力を貸したということになる。御杖の神は、このように理と欲の両立のための理論の中ではたらく機構の一つと化している。

## 五、まとめ

御杖は理と欲が、天地の性、つまり清陽と重濁という性を享けていると考えていた。理と欲のものである天地は、相反する性質を持ちながらも決して対立せず、天からの降気と地からの昇気は和順している。だから、人の理と欲の両立も、天地の昇降二気のと順の形に従うことによって可能であると考えられた。天地においては、昇降二気が次第を乱さず和順するところに万物の無窮の生生が実現されていた。昇降二気とは神であった。生生力である神が秩序正しく昇降二気として動くところに生生が実現されていた。天地は上下に

わかれ、昇気からはじまって生生が実現されている。人もこれにならって、理と欲をわけ、欲をまず成就させ、それによって自然に理も成就されるという方法をとるべきであると御杖は考える。それが天地の示す和順の形にそうことであり、すなわち神道に依ることであった。一般的には不可能と考えられる理と欲の両立も、この方法によれば成就すると考えられた。

御杖の神の特色は、三の2でみたように、生生力としての実体を失い概念化されている面があることと、四でみたように、そのはたらきが、我と彼の理欲の調整の場においてあらわれることにある。御杖にとつて、天地とは生生が実現される場であるよりも、むしろ人に理と欲の調整の方法を示すモデルであった。したがって、天地において昇降二気として秩序正しく生生を繰り返す神も単純に生生力だけではありえず、三の2でみたように概念化されて理と欲の両立のための理論構築の要とされ、我と彼の理欲の調整というおよそ神にふさわしからぬはたらきをなす。御杖は神を天地や理欲等の概念とともに再構成し、人の理欲の調整のためにはたらく機構の一つとした。御杖の神は、その実質的なはたらきの場を我と彼の関係の中に移し、我と彼の内面においてひそやかにその神さびをなしている。

## 《註》

引用は全て『新編富士谷御杖全集』（思文閣出版、昭和五十一年（平成五年））によった。巻数はたとえば全集一巻の場合、全一と

記した。引用に際して適宜表記を改めた。

(1) 『古事記燈神典』(全一、五三二頁)に「天地化成して心身となり心身より理欲の二念生し」とあり、心に属する念とは理であり、身に属する念とは欲であることがわかる。

(2) 御杖の神観念については、志田延義「富士谷御杖の学的基盤」(『国民精神文化』第三巻第一号、国民精神文化研究所、昭和十二年)の十三頁、安藤直彦「富士谷御杖の根本理念「真」について」(『神道宗教』第七五〜七七号、神道宗教学会、昭和五十年)の四一九頁に考察がある。志田氏は、御杖の神観念には吉田神道の影響があると論じ、安藤氏も、御杖が人と天地を同物としてとらえていることに注目している。

(3) このように神は幽中にあり、人力では如何ともしがたい不動の性質を持つ。また欲も「深く胸臆にこめてみそかに行ひて他の見聞を耻る」(『古事記燈七神三段神世七代』全一、九七頁)点において幽中にあり、「思ひすつる事あたはずしてなほその所欲の達せまほしき心はうちもみじろかぬ」(同右)という不動の性質を持つ。つまり神と欲は同じ性質を持っており、その意味において神は欲である。

(お茶の水女子大学聴講生)